

# 「誤答の傾向と原因調査」について

高 宮 孝 治

## ( 1 )

全国国立大学付属高等学校連盟の高校部会は数年前よりその教育研究大会を例年持って来たのであるが、それが連盟の例年の大会として継続的に計画的に行われるようになって以来、本年度で第4回目を迎えることになった。

36年度は東京教育大付属高校駒場分校において去る11月に、前年度に引続き社会科、新しく外国語科、及び生活指導の三分科会にわたって研究発表大会がもたれた。その中の外国語分科会即ち英語部会について申せば、英語部会は36年と37年の2年継続研究発表を行う事となり、その第1回目が上記駒場で行われたのである。この2年継続による英語部会の研究課題は、36年1月11日、12日箱根で開催された準備会において次の通り決定されたのであった。

「テストにあらわれた間違いの原因調査」がその研究テーマとなり、各付属高校において、この共通テーマの下にそれぞれ自由な立場から研究を進めその第1回の発表を終わったわけである。その駒場に於ける第1回の発表内容は次の如くであった。

### 「テストにあらわれた間違いの原因調査」 (第1回中間報告)

- A校 第5文型の和訳における共通の誤りの原因について
- B校 英作文にあらわれた誤答の原因分析について
- C校 文の複雑化に伴う抵抗について
- D校 綴字の間違いについて
- E校 誤答調査にみる指導の問題点
- F校 テストにあらわれた間違いの原因調査(全般的文法的事項及び発音)
- G校 読解の誤りの分析
- H校 自由作文における時制の研究
- I校 文法的作文の見地からみた高校各学年の英語における誤りの傾向調査
- J校 実際のテストにあらわれた間違いの原因調査と対策
- K校 1年2年を比較対象としたテストにあらわれた間違いの原因調査

以上の11校による報告発表があり熱心な質疑応答があり、結びとして東京学芸大学助教授江川泰一郎先生の講評があった。この英語分科会の研究は本年即ち37年秋の第4回大会が金沢大学付属高校が主催で行われるが、その際、結論的発表報告をみる事に予定されたのである。

## ( 2 )

**誤答の場面** —— 「誤答」の意味を慶義に解すれば、

**第1に**、実際の授業その他教師と生徒との応答にあらわれた生徒の間違った答えを意味し

**第2に**、実際のペーパー・テストに見出された答案上の誤りがあり

**第3に**、教師が明らかに明白な意図をもって、誤答の傾向を調査せんが為に作製された特殊な問題に対する生徒の間違いを意味する。

**誤答の内容** —— 「誤答」としてあらわれたる内容は、純粹に語学的方面における

誤り、例えば文法的、綴字的、等の如き場合が多いであろうが、又その一面、英語という語学的立場を離れて、日本語的表現による誤りがあり、文法とは別に思考能力上から来た誤答があるであろう。

### 誤答の研究方法

——前述の誤答の場面の第1と第2とを合わせて考えるならば、教壇あるいは実際の随時のテスト用紙にあらわれた誤答箇所を集録し、それ等を分類区分して、その中から誤答の一般的傾向を系統づけんとする所謂、帰納的方法がある。又その反対に、前述の誤答の第3の場面における如く、句型、綴字、文の構成等において、教師がその経験からして、生徒の最も犯し易い誤りを予想する問題を作製しテストして、その統計学上より何らかの暗示を得んとする所謂演繹的方法、あるいは実験的方法があるであろう。それ等のいずれの方法をとるかは、各種の状況等を考慮すべきであるが、私見であるが、この誤答調査の目的とする処は、あくまで英語指導という教育的立場に於いてであり、より实际的に、より具体的に直接生徒の指導上に益する為には、中間考査、期末考査、あるいは実力テストに於て、生徒が知らず知らずに実際に犯した誤りを対象とする事も一案と考えられる。かくしていろんな誤答を at random に pick up して、分類して、その原因を追求し、更に一步進んで、その対策を工夫することが、この課題の目的とする所であろう。しかるが故に私は、その帰納的方法をとる事にして、先づその予備的試みとして第1年は実施し、その中間発表としたのである。今ここにその一端を述べ、更に第2年目の方針を考えてみたい。

### ( 3 )

「テストにあらわれた間違いの原因調査」の一例 (高宮孝治)

#### 例1 和文英訳における仮定法・特製の誤用

問題文 「あんな不愉快な男が同僚にいなかったら、われわれの生活はもっと平和にいくのだが。」  
(3年実力テストの一部)

誤答 If there had not been such an unpleasant fellow among our friends,.....

(160人中21名)

原因と対策

事実に反する仮定法の形を用いたのは良いが、日本語の表現にさそわれ、過去の事実に反する仮定文にした。此の「いなかったら」は前後の意味から考えて、明らかに現在の仮定であり、是は日本語の動詞の慣用語的用法による誤解である。日本文にはかかるあいまいな表現が多いから直訳におち入らず全文の意味を充分くみとらねばならない。

#### 例2 発音問題における誤答

問題文 下線部の発音記号を別表の発音記号群からえらばせる問題5題の中その4題

(3年実力テストの一部)

イ southern    ロ knowledge    ハ sweat    ニ thought

誤答 イ southern の下線部を [au] にしたもの (160人中 16名)

ロ hnowledge の下線分を [ou] にしたもの (160人中 32名)

ハ sweat の下線部を [i:] にしたもの (160人中 12名)

ニ thought の下線部を [ou] にしたもの (160人中 118名)

原因と対策

(イ)は south に (ロ)は know に attract され (ハ)は eat にさそわれ (ニ)は

ough にひかれたのであろう。特に (ロ) と (ニ) の如くあまりにも知り過ぎている語に於てかかる先入観的誤りを犯す傾向が多いから、初歩の時代に充分注意しておくべきである。

例 3 句から節に転換の場合の誤答

問題文 'Because of the strong tides, they must swim……' 下線部を Clause にかえよ。  
(1 年中間考査)

誤答

イ Clause の意味がはっきりつかめず、文の構成が全く出来ないもの。  
(165 人中 11 名)

ロ 一応 Clause の形をととのえながら、接続詞を欠くもの。  
(165 人中 24 名)

ハ 接続詞を用いながら、その種類を誤用せるもの  
(165 人中 6 名)

例 For the tides are strong,

ニ 接続詞を正しく用い Clause を完成しながら、述語動詞を誤用せるもの。  
(165 人中 6 名)

例 Because (as) the tides is strong,

原因と対策

(イ) の如く Clause の転換を知らないものは論外として、一応文形が出来ながら、接続詞を忘れるのは、主語と述語の、文を完成することにのみ気をとられ、全文の流れを見失ったものである。Clause は常に前後の文と結合してのみ完全であることを徹底させる事が必要である。私見では次の 3 段階を生徒に体得させる。

第 1 段階 先づ主語と述語を備えた文を完成する。

第 2 段階 次ぎに前後の意味を考え適当な接続詞を求める。

第 3 段階 最後に動詞の時制に留意する。

例 4 否定文における錯覚による誤り

問題文 Not a sound was to be heard, (either, neither) within the house (or, nor) without. ( ) の中の適語をえらぶ。  
(2 年文法考査)

誤答 (neither) (nor) とせるもの。(168 人中 29 名)

原因と対策

是は Unless……not……, の如く生徒のよく犯し易い誤りで、意味を正しく理解しながらも錯覚によって犯すもので、特に否定語が、距離が著しくはなれた場合、見落すのであろう。適語選択問題は、完成後必ず全文を読み返し内容的に矛盾がないかを調べるよう習慣づけることである。

例 5 和文英訳における不定冠詞の誤用

問題文 「あんな不愉快な男が同僚にいなかったら……」 (3 年実力テスト)

誤答 If there were not such a unpleasant fellow,  
(160 人中 32 名)

## 原因と対策

(a.) (an) の用法は初歩時代より熟知しており、**an apple, an umbrella** では絶対に間違わず、又、文法の正誤問題としては正しく解答しながら、和文英訳となると、文の構成にのみ気をとられ、無意識に誤り、しかも「不愉快な」に対する訳語 **unpleasant** を思い出した事に満足し、発音上まで留意せず無造作に **a** としてしまう。是は平生の注意力と語感の問題であるが、和文英訳にあつては、文の完成後、意味は勿論、文法的にも再検討する習慣をつけねばならぬ。同時にすべての英語は声を出してよむ習慣をつけておくべきで、そうすれば、**a unpleasant** とはしないであろう。

### 例6 先入観による誤訳

問題文 I had gone through them in a little over a year, putting down in red ink at the bottom of each page all the words that were unfamiliar to me.

(3年実力テスト)

誤答 下線部を「私にみられないすべての単語の各々の頁に赤インクで、しるしをつけながら…」とせるもの。  
(160人中 32名)

## 原因と対策

生徒は上文の和訳を読み返したであろうか。一体どういう **situation** なのか、自分の訳で納得出来たのであろうか。大体の意味を先入観をもって自己流に判断し、逐語的に日本語におきかえ、文法的つながりの理解出来ない箇所も、先入観と想像力とで勝手に連結し、唯日本語が出来上れば、内容の理論的意味は考慮せず満足している。訳文は書いた後論理的矛盾がないか検討せねばならない。

### 例7 訳語の不適切による誤り

問題文 The mere fact that I had felt the same need as Browning intensified my sympathy for him

(3年実力テスト)

誤答 下線部を「彼に対する私の同情を強めた」とせるもの。

(160人の中 62名)

## 原因と対策

此の場合の **sympathy** は内容からみて、当然**同情**ではなく**共鳴**、**共感**である。1つの単語を思い出すのが、手一ぱいで、うまく想起された場合それに喜んで、内容を考えずその語をすぐに訳文にあてはめてしまう傾向がある。単語にはいろんな意味があるのだから、内容に応じた適語をえらぶようにさせなければならない。

### 例8 文の転換における時制の誤用

問題文 The room was too small for us to enter. を複文にかえず。

(1年期末考査)

誤答 The room was so small that we cannot enter. とせるもの。

(165人の中 14名)

## 原因と対策

ポイントとなる構文の完成にのみ気を取られ、全体の時制を忘れてしまう。是はすべての **Clause** の転換問題にあてはまることであり既に述べた如く、第1 (S+P) 第2 (接続詞) 第3 (時制) の3点に日頃留意させておかねばならない。

例9 比較文における much, more の attraction による誤用

問題文 The cities of the future will be ( ) bigger than those of today.

( ) に適語を1語入れよ。 (1年期末考査)

誤答 ( ) に more を入れたもの (165人の中 21名)

原因と対策

生徒が ( ) に入れるべき語を, much か more かと判断したのはよいが, 比較級 bigger の語に attract され more としたか, あるいは more beautiful との連想による無意識的な誤りである。形容詞の原級, 比較級, 最上級を強める副詞の用法を整理させる。

例10 文形にとらわれたる錯覚による誤訳

問題文 ……; yet there were still thirty words or so that had not struck in my memory, but that I did not mind.

(3年実力テスト)

誤答 but that I did not mind の that を that had not struck の that と同じく関係代名詞と考え, 「私の記憶に残っていないが気にもかけない30前後の単語が依然としてあった」とせるもの (160人の上 27名)

原因と対策

此の文は長文の一部で前後の意味を考えれば, この that は前文をうける単なる代名詞で「……30ぐらいの単語があったがそんな事は気にもかけなかった。」となるべきである。

文の内容をよく考えず, 又 mind の意味をつかまず, 前の that につられて, 形のみから早合点して誤ったのであろう。もう少し全体の意味に連絡し如何なる章句も常に全体の一部として考えていくべきである。

例11 錯覚又は reading 不足による綴字の誤答

問題文 綴字の正否をとう問題の語群中誤字として出せるもの

especialy, disapointed, interupted, achievement, imprisoment.

(1年中間考査)

誤答 上の単語を誤字と判断しなかったもの (165人の中約1/3)

原因と対策

語尾が ly か lly か, あるいは子音字がダブルのか否か等は他の既知語の場合の例を錯覚混同して誤りを犯す, acheivement はあいまいな記憶から imprisoment は平生のリーディングの不正確から来たものであろう。

( 3 )

以上, 誤答に関する断片的調査の報告であるが, 私達はかかる実際の用例を更に継続して集め, 整理し, 分類区分してそこから何等か指導上参考となる結論的なものを導き出したいと思っている。